



人作家集
3

レタリア文学集・23



日本プロレタリア文学集・23

婦人作家集(三)

定価 二八〇〇円

一九八七年十一月三十日 初版©

発行者 山 本 功

発行所 株式会社 新日本出版社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷四の二五の六
電話 (〇三) 四二二一八四〇二(営業)
(〇三) 四二二一九三二三(編集)
振替番号 東京三一一三六八一

印刷所 光陽印刷株式会社
製本所 みさと製本印刷株式会社

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

ISBN4-406-01564-7 C0393

日本プロレタリア文学集・23

婦人作家集
(三)

目次

北川千代

隣りの夢……………三

堀江かど江

転倒……………一九

葵イツ子

戦慄……………二五

望月百合子

魔石を打ち碎け……………三

住井 亨

土地の代償……………四

搾取網……………四

土地の反逆……………五

農村雑景……………六

戸川 静子

行きつくまでは……………六

ゴム靴……………七

小坂多喜子

日華製粉神戸工場……………七

残業手当……………一〇頁

野稻ハツ

弟へ……………一二頁

松井締子

五月雨……………一三頁

八木秋子

柿をもってきた父……………一五頁

高群逸枝

黒い恋……………一四頁

戸田豊子

歩む……………一五頁

鑄物工場……………一六七

川瀬美子

女看守……………一八三

その村の新年……………一九一

姉妹……………二〇一

若林つや

光を感じる子……………二一九

押し寄せる波……………二三四

集団の力……………二四三

女子青年団……………二五七

おいらん草……………二六五

大田洋子

朱い訪問着 二六四

女を連れに行ったルミ 二九一

小野田慶子

重のおっ母さん 三〇三

大谷 藤子

転形期 三二五

貴き御事業 三三三

平林英子

消え残る生活 三三五

発 端 三四六

模範工場 三五九

お 信 三七四

育くむもの 三六三

藍川 陽

階級に育てられる女 四〇五

霧が降る 四二四

後藤かつ子

踊る戦線 四三九

矢田津世子

反 逆 四四九

罌を跳び越える女 四六一

横田 文子

導火線 四七一

松村清子

母への文……………四七

畠山ひさ

労働者の町……………四九

大石千代子

明日へ行く者……………五九

解説……………佐藤静夫…五三

発表年月日と掲載文献……………五五

北
川
千
代

隣りの夢

いつのまに越して来たのか、私たちは隣りにいながらまるで気がつかなかった。夕方八百屋から帰って来た時、いつも閉め切つてある隣りの二階の窓があいて、そこに藤色の着物の端を見たのが最初だった。

「ああやとお隣りの二階も借り手がついたな」

そう思ったけれど、長屋の汚い四畳半の二階と、夕方の光りの中で見た藤色の着物の仄かな感じと、どうも連絡がとれなくなつて、どんな人が越して来たのかまるで見当がつかなかった。

「紺紺こんこんの着物を着た若い男が、いま井戸端で顔を洗つていたよ」

翌朝、自分も濡れた洗面器をぶらさげて帰りながら良人が云つた。藤色の着物と紺紺と——そこで私の乏しい想像

は、ある一組の姉と弟とをひそかに描いたのだった。お金がなくなつた姉弟二人がこんな長屋に落ちこんで来たのだろう。そして弟はどこかへ働きにゆく——姉さんは弟の世話をしながら内職か何かをする——そうにちがいないと一人できめていた。けれどその想像は無惨にも当たっていないかつた。

その日の午後、井戸端で洗濯をしているとお隣りの台所から出て来たのは、その藤色の着物の女だった。しかしその人の藤色の着物は、私の想像していたような軽いセルのひとつではなく、事務員の着る上つぱりの古いのを、エプロンの代りに着ているのだった。そしてその上その人は赤い手絡てがらの丸髻まげに結つていた。

「だめ、姉弟ではなかったの、やっぱり私みたいに単純な生活しかして来なかった者は、どうも自分の境遇の範囲にしか想像が出来ないから情けないわ」

私は夕飯の時、工場から帰って来た良人に音なく取消しをした。

その翌日は日曜だった。

私が台所で昼飯の支度をしていると、少しばかりいる鶏の餌にするのだといつて、さつきから裏のどぶでみみずを掘つていた良人が笑いながら入ってきた。

「おい、隣りの二階の人は何をしているか知っているか」

良人はバケツの中でガシャガシャ手を洗いながら云った。
私はその口振りからおして、この人はいま聞いて来たんだ
なと思った。

「しっていますわ」

「じゃ云ってみろ」

「はつり屋」

それはこの間まで、彼のしていた仕事だった。

「ばか——。郵便局に出ているんだよ、いま二階の細君か
ら聞いたんだ」

「もうそんなお話をしたの」

「そうさ。向うから話をしかけるんだ——」

「厭な方」

「だってほんとうだもの。——いま俺がみみずをなじって
いると、傍に立って見ているんだ。そして話をしたのさ。

浅草の本局だそうさ。本局は今日も休みじゃないんだっ
て……」

それで私はわかったような気がした。

「ねえ、あの奥さんもきつと郵便局に出ていたのね、そし
てきつと二人して好きになったんだわ」

「そうかもしれない」

私たちはこのつつましい新世帯に、何となく微笑みを投
げかけたい気がした。そして一足さき歩き出した者の年上
らしいいたわりと好奇心とでひそかに眺めていたのだった。
配達夫である彼女の若い良人は、毎日昼少し前に出かけ
て、翌日の昼頃帰って来た。亭主が帰ってくると隣りの二
階は急に賑やかになった。僅か壁一重でつづいているので、
二人の話し声は私たちの二階へかなりよく聞えてきた。その
とりとめもない話を、よく私は夕方帰ってくる良人への話
題にした。

「そりゃ仲が好いの。時々亭主の髪なんかとかしてやって
いるようなの。あのピカピカ光らせて分けた髪は、きつと
細君の好みなのよ」

そんなことを云って、こっちの二人も笑ったりした。

二階へこの夫婦が越して来てから、時々こっちの夜具戸
棚にも鼠が出るようになった。それを気にしているうちに、
私は干乾びた眼差の頭を自分の蒲団の上で見つけた。

「きつとお隣りで食べ物を入れておくのよ。それをこっち
へ引っぱってきて食べるのに違いないわ」

夜具戸棚のむこうにお魚があるのは厭だなと思ったけれ
ど、狭い二階にいる人に、戸棚に食べ物を入れては困ると
断りにもゆけないのでだまっていた。